

一般入学者選抜直前、ちょっと心の栄養として読んでくれればネ！⑤

先月23日に行ってきました「中之島美術館」

◆この美術館の構想が発表されたのは1983年。つまり約40年もの準備期間を経て、オープンとなった。開館記念として2月2日～3月21日に「Hello! Super Collection 超コレクション展 —99のものごと—」開催されている。19世紀後半から現在までの日本と世界の優れた美術とデザインを核とする6000点のコレクションから、珠玉の作品約400点が鑑賞できる。とにかく400点もの様々なジャンルの作品が展示されているので、見終わると疲れてました。まあ、詳しいことは、ネット検索してみてください。それだけでも鑑賞になる。

◆その展示の一つに、江戸時代中期の真言宗の僧「慈善飲光」(1718—1804)《不識(達磨画賛)》紙本墨画(132.5×54.2cm)があった。この書や僧は、全く知りませんでした。…「不識」は知っていました。そして、この菩提達磨「不識」には有名な話が残っているので、今日はそれを紹介します。

以下「公益財団法人仏教伝道協会」HPを参照しました。



菩提達磨(ぼだいだるま)は、6世紀初頭に禅をインドから中国へ伝えた高僧。禅観はインドに由来するが、禅宗は中国で独自に起こり発展した。そこで、達磨は中国禅宗の始祖と称されされている。そして今に伝わるエピソードも禅宗では大切な教えの一つとなっている。

そのエピソードの一つに…インドから海路、中国まで渡った達磨を、当時大変喜び、熱心に迎え入れた王が梁(りょう)の武帝(ぶてい)だった。武帝は仏法に深く帰依(きえ)し、世間から「仏心天子(ぶっしんてんし)」と崇められていました。

ある時武帝は、都がある金陵(現在の南京)の宮中に達磨を招き、質問をします。「私はこれまでにたくさんの寺を建立し、僧侶を育ててきた。私には将来、どれだけ大分の幸福もたらされるか?」と。

この問いには、おそらく次のような意図が込められてた。武帝は、仏教の本場であるインドから来た達磨という高僧によって、自分自身の善行に対しての果報を、確証して欲しかった。しかし、そんな思惑は達磨の衝撃的な返答によって、完全に打ち砕かれてたのだ。

達磨は「無功德(むくどく)」と、突っぱねた。武帝の行いの、どれもこれも果報を受けられるものではない。功德欲しさに行う善行が何の役に立つであろうか。褒められよう、認められようという物欲が、せつかくの行いを悪行にしてしまうと。

要するに武帝の行いは、あくまでも利己的なものにすぎない。自分の欲望を満足させるだけの行為を、「信心」という名で美化しようとしていることを、達磨は見抜いていた。望みの答えを聞き得なかった武帝は、問いを重ねます。「禅の真髓とはいったいどのようなものか?」と。それに対して達磨は、「廓然無聖(かくねんむしょう)」と喝破(かつぱ)する。

「廓然」とは、からりと開けた、何のとりわれもない無心の境地を表したもので、その無心のところには、聖なるものも、凡なるものも、何も比べるものは無いと達磨は言い放ったのだ。自分が信じて求めてきた仏法というものに、「聖なるもの」が無いと言われた武帝は、どうしても納得がいかない。今までの行いの全てを否定されてしまったのだから…。そして、そんな達磨に対して「では、私の前にいるお前は何者だか?」と尋ねる。

達磨は一言、答える。「不識(ふしき)」と。

この「不識」は「そんなもの、知らない」という意味ですが、禅での解釈はそう簡単ではない。達磨が「不識」と言ったのは、武帝の心にある「執着」というものを捨てさせるためだった。

人間はどうしても、聖とか凡とか、生とか死とか、有るとか無いとか、好きとか嫌いとか、対立する二つの思考にとらわれてしまう。禅ではとにかく、この対立する二念を嫌う。「識る」、「識らず」と、自分が生まれてから身につけてきた知識や経験に惑わされることなく、それらを完全に捨て去ってこそ、禅でいうところの「不識」を体得することができるのだと。

◆どうでしたか「無功德(むくどく)」&「廓然無聖(かくねんむしょう)」&「不識(ふしき)」なかなか奥が深いですね。
 一般入学者選抜学力検査まであと4日、卒業まであと6日
 明日は、脚下照顧(きゃつかしょうこ)について

